イスラーム世界研究　第9巻（2016年3月）309–314頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp.309–314

「苦しみの姿」――イクバールのウルドゥー詩（9）――

松村　耕光* 訳

はじめに

本稿は、1904年4月、イスラーム擁護協会（Anjuman-e Ḥimāyat-e Islām）の第19回年次大会で発表され、後にウルドゥー第1詩集『鈴の音（Bāng-e Darā 1924年）』に収められたムハンマド・イクバール（Muḥammad Iqbāl）の長詩「苦しみの姿（Taṣvīr-e dard）」の全訳である[1)]。

1905年から1908年にかけての西欧留学から帰国したイクバールは[2)]、人類を分断する思想であるとナショナリズムを厳しく批判するようになるが[3)]、留学以前は、「インドの歌（Tarānah-e Hindī『宝庫』1904年10月号）」[4)] に見られるように、ムスリムも他のコミュニティーもインドへの帰属意識を持つことが重要であると考えていた。

私たちのインドは世界で一番素晴らしい
　　インドは私たちの薔薇園で、私たちはインドの夜鶯（ブルブル）だ[5)]
……
宗教は憎しみ合えとは教えていない
　　私たちはインド人、インドは私たちの祖国

「インドの歌」

本詩「苦しみの姿」はこのような初期イクバール思想を理解するのに欠くことのできない重要な作品である。

---

*　大阪大学大学院言語文化研究科教授

1）ウルドゥー文芸誌『宝庫（Makhzan）』の1904年3月号の付録としても出版されたようである。詩集収録時に多くの詩句が削除されたということである（Ghulām Rasūl Mehr, *Maṭālib-e Bāng-e Darā*, Lahore, 1982, p.69）。

2）1905年9月にラホールを出発し、ケンブリッジ大学、ミュンヘン大学で学んで、1908年7月にラホールに戻っている。

3）詩集『鈴の音』の西欧留学後の詩を収めた部分に「ナショナリズム（一つの政治概念としての祖国）（Waṭaniyat: ya‘nī waṭan ba-ḥaiṯhiyat ēk siyāsī taṣawwur kē）」という短いが重要な作品がある（制作年不明）。この中でイクバールは次のようにナショナリズムを批判している。
　　このために世界の人々は対立し
　　交易の目的は征服となった
　　政治から正義がなくなり
　　弱者の家が荒らされている
　　神の被造物たる人類はさまざまな民族集団に分裂し
　　イスラームの紐帯（qaumiyat-e Islām）は切り捨てられている

4）この詩は今なおインドでは愛国歌として愛唱されている。

5）ウルドゥー詩の伝統では、薔薇は愛の対象、夜鶯（bulbul）は求愛者の象徴である。

苦しみの姿

私の声は聴力の恩恵に与ることはない[6)]
　　沈黙が語り、沈黙が私の言葉となっている
おまえの宴では黙っていなければならぬのか
　　私は話をしたいのに
花園一面に飛び散った私の物語の本――その頁を
　　チューリップや水仙や薔薇が拾い上げた
鳩や鸚鵡や夜鶯は――
　　花園に住む鳥たちはみな私の嘆き方を模倣した
蠟燭よ、涙となって蛾の目から滴り落ちよ[7)]
　　私は呻吟し、私の話は悲嘆に満ちている
ああ、この世にどのような喜びがあると言うのか
　　永遠の生命も突然の死も叶わない
私だけが泣いているのではない――花園全体が泣いている
　　他の花の秋は私にも秋と感じられるのである[8)]
私はこの悲嘆の館で鈴のように過ごしている
　　悶える心は声なき嘆きを秘めている[9)]

この世の庭園の楽しげな宴とは縁がない
　　「歓び」が憐れんで涙を流すほど歓びとは縁がない
私の不運を発話力（くち）が嘆き悲しんでいる
　　私は口ごもられた、聞く耳を恥ずかしがる言葉である
私は飛び散った一握りの土である――しかし、私には解らない
　　自分がアレキサンダーなのか、鉄鏡（かがみ）なのか、埃なのか[10)]
いずれにせよ、私を生み出すことが天の目的であった
　　私はその本質が光であるような暗黒である
一握りの荒野の土が隠した財宝――それが私である
　　私が何処にいて、私が誰のものであるのか、知る者はいない
広い世界を見て回る必要はない
　　私自身が小宇宙であり、一つの世界である
酒でも酌人でもなく、酩酊でも酒杯でもない
　　私はこの存在の酒場の万物の本質である

6）誰の耳にも届かないということ。

7）蠟燭よ、一人で泣いていないで蛾の涙になれ、他者の悲しみを知れ、という意味であろう。ウルドゥー詩では、蛾は求愛者の象徴であり――蠟燭（の炎）に恋焦がれているとされる――、蠟燭の流れる蠟は流れる涙に譬えられる。

8）秋は衰亡の季節である。

9）この対句はペルシア語。インドのペルシア語詩人ベーディル（Bēdil 1644–1721）の対句を改変して引用している。

10）アレキサンダー大王によって鉄鏡が発明されたという伝説に基づいている。「アレキサンダー」は創造者、「鉄鏡」は創造物、「埃」は取るに足らないつまらないものを意味している。

心の鏡は両世界の秘密を映し出している[11)]
　私は映し出されたものを言葉に表しているのである

私は華麗な言葉の使い手たちの中にいるが、私には
　天上の鳥たちも私の仲間となるほどの言葉が与えられている[12)]
心を掻き乱す狂気のおかげで
　私の心の鏡は運命の秘密を知ることができた
インドよ、おまえの姿は私を嘆かせる
　おまえに関する話ほど恐ろしい話は聞いたことがない
素晴らしい贈り物であるかのように嘆きが私に与えられた
　運命の筆はおまえを哀悼する者の一人として私の名を記した
花を摘む者よ、花園に花びら一枚残してはならぬ
　幸運にも花園の番人たちは争っている[13)]
天は雷を隠し持っている
　花園の夜鶯たちよ、巣の中で漫然と時を過ごしている場合ではない
愚か者よ、私の言葉を聞くがよい――これは
　花園の鳥たちが毎日熱心に唱えている言葉である
愚か者よ、祖国のことを考えよ――災難が降りかかろうとしている
　天上ではおまえを滅ぼす相談が行われている
現在と未来に目を向けなければならぬ
　過去の話を蒸し返して何になる
いつまで沈黙しているのか――抗議の声を上げる歓びを知らねばならぬ
　地上にいようと、声を天に響き渡らせなければならぬ
インドの人々よ、目を開かなければ滅亡するであろう
　跡形もなく歴史から消えてしまうであろう
行動する者こそ天に愛される者である――
　これこそが天の掟なのである

今日、今まで秘めてきた傷を晒すことにする
　血涙によって宴を真っ赤に染め上げることにする
胸に秘めた炎ですべての心の蠟燭に火を灯し
　おまえの漆黒の夜を明るく照らすことにする
痛みを知る心が蕾のように生まれ出るように
　花園にこの一握りの土を撒き散らすことにする[14)]
飛び散った数珠玉を一本の糸に通すことは難しいが
　この困難を克服せずにはいないであろう

11）「両世界」 現世と来世。
12）「天上の鳥たち」 天使のこと。天使たちが仲間となるほどの言葉とは、真理を表した言葉ということ。
13）「花を摘む者」 イギリス人のこと。「花園の番人たち」 インド人のこと。
14）「この一握りの土を撒き散らすことにする」 自己を犠牲にする、或いは自分の思想を広く知らせるということ。

友よ、私が胸を抉るのをとめてはならぬ
　愛の傷は見せずにはいられない
この目が見たものを世界に見せて
　おまえの目も見開かせることにする
蔽われていても鋭い眼光から逃れることはできない
　時代が何を必要としているのか、それは見抜いているのである

おまえは心に向上の歓びを教えず
　足跡のように低きに甘んじる一生を送った
自分の宴にだけ関心を向け
　外の世界に目を向けようとはしなかった
美女の美しい姿に心を捧げ続け
　心の鏡に自分の美しさを見ようとはしなかった
愚か者よ、偏見を捨てるがよい――世界という鏡の部屋に
　映っているのは――おまえは敵視しているが――おまえ自身の姿である
おまえは芸香のように声を抑えつけたが[15)]
　苦しめられれば抗議の声を上げなければならぬ
おまえは愚かにも鏡一面に指甲花（ヘンナ）を塗ってしまった[16)]
　清浄な心にしがらみの染料など必要であろうか
大地のみならず大空もおまえの藪睨みを嘆き悲しんでいる
　何ということであろうか――おまえはコーランの章句の意味を歪めてしまった[17)]
口先だけで神の唯一性を唱えて何になる
　おまえは妄想の偶像を神に仕立ててしまった
おまえは井戸に投げ入れられたヨセフに何を見出したのか
　愚かにもおまえは普遍的なものを限定的なものにしてしまった[18)]
説教壇で雄弁を振るいたいと願ってはいるが
　おまえの説教などただの作り話である

蛾を駆り立て、露を泣かせるあの美しさを――
　世界を恋焦がれさすあの美しさを自分の濡れた眼（まなこ）に見せるがよい
欲望に囚われた者よ、物を見るだけがその目的ではない
　誰かが何か意図があって人間の目を創ったのである
全世界を見たとはいえ
　ジャムシード王は酒杯に自分の本質を見なかった[19)]

15）芸香は邪視除けのために火にくべられたとき、音を立てる。言わば、火にくべられるまで芸香は音を内部に抑えつけているのである。
16）指甲花の染料は手足を飾るために用いられる。
17）「おまえはコーランの章句で十字架を作ってしまった」とも訳せる。
18）ヨセフは兄たちに妬まれて井戸に突き落とされた。この句では、ヨセフは普遍的なものの象徴として言及されている。
19）古代ペルシアの伝説上の王ジャムシード（Jamshīd）は、世界の様子を映し出す酒杯を所有していたとされている。

排他主義は偏見という実をつける樹木である
　この実こそがアダムを天国から追い出すのである
太陽の引力では花びら一枚動かない
　露を上昇させるのは立ち昇ろうとする意欲
愛の傷を負った者は薬を求めない
　この負傷者は薬を自ら作り出す
愛の火花によって心は光で満ち溢れ
　小さな種子からシナイの花園が生まれ出る[20)]

意欲の剣に切られた傷を治さないこと――それが苦しみの薬である
　傷を縫い合わせたりしないこと――それが治療である
滅私の酒で私は天高く舞い上がる
　色が消え、私は芳香となることを学んだ[21)]
祖国を哀悼するこの目に涙の涸れることはない
　詩人の目の勤行（つとめ）とは沐浴し続けることである
薔薇の枝に巣を作ることなどできようか
　屈辱しかない花園にどうして住むことができようか
悟るがよい――自由は愛の中にあるということを
　自他の区別は隷属を意味するということを
自尊心があるからこそ水の中でも杯を伏せていられるのである
　おまえも川の泡のように生きなければならぬ[22)]
同胞に関心を持たぬ者よ――生き残りたいのであれば
　同胞に無関心であってはならぬ
人間愛は魂を育む美酒である
　それは私に酒杯や酒壺なしで酔うことを教えてくれた
病める民族を癒したのは愛である
　癒された民族はその眠れる運命を目覚めさせたのである

愛の荒野は異郷の砂漠でもあり、故国でもある
　この荒野は鳥籠でもあり、巣でもあり、花園でもある
愛は目的地でもあり、砂漠でもある
　それは鈴であり、隊商である――案内人であり、盗賊である[23)]
愛は病であると人は言う――しかしこの病には
　天がもたらす不運への妙薬が潜んでいる
心を燃え上がらせること――それは光に満ち溢れること
　燃え上がった蛾は宴の蠟燭（ともしび）となる

20）モーセがシナイ山で神の光を見たという伝承に基づいている。
21）芳香には色がない。
22）泡を伏せられた杯に見立てている。水の中にあっても水を求めないような自尊心を持つことが肝要ということ。
23）「鈴」 隊商の駱駝が付けている鈴のこと。

美は唯一無二であるが万物に見出すことができる
　　それは美女シーリーンであり、ベーストゥーンの山であり、山を穿った男である[24)]
諸々の民族を滅ぼしたのは教義と慣習の違いである
　　我が同胞の心には祖国を思う気持ちが少しでもあるのであろうか
口には舌も話す力もあるが
　　苦しみに溢れた話はあまりにも長く、もはや口を閉ざすとき
話の糸は短くならず、私はそれを手放した
　　話には際限がなく、私は沈黙によって語ったのであった[25)]

24）「山を穿った男」とは、ファルハード（Farhād）のこと。ベーストゥーン（Bēstūn）の山を穿って道を通せばシーリーン（Shīrīn）を与えるとホスロー（Khusrau）王に言われたため、ベーストゥーン山を手作業で穿った。

25）ペルシア詩人ナズィーリー・ニーシャープーリー（Naẓīrī Nīshāpūrī d. 1604）の対句を引用している。